令和４年度富山県水墨美術館運営委員会　議事抄録

令和４年９月２８日（水）
富山県水墨美術館映像ホール

１　開会

２　委員長選出

３　議　　事
（１）令和３年度事業報告・令和４年度事業実施状況
（２）指定管理者の事業概要

４　意見交換

５　閉会

１２名中出席１２名

おもな発言

・25 周年となると、「今までと変わった」という印象を発信するとよいのではないか。例えば常設展の使い方としては目玉になるような作品の見せ方の工夫など。また、立地的に「ついで」という感じにならないので、集客につながるような、例えば美しい芝生を活かしたテラス席のある誰でも利用できるようなカフェなど、展覧会だけでなく、プラスアルファがほしい。友だちや子どもたちと、展覧会を鑑賞するだけでないプラスの時間を過ごしてもらえるような工夫があるとよいと思う。(A 委員)

・「常設展」という言い方を変えてはいかがか。常設、というと変わらない印象があるので変わったことがわかるアピールを工夫できるのではないか。また、1 点の作品を、特別に、集中的に見せるような工夫をしてはどうか。大規模工事というよりは改修程度の予算でガラスケースを増やすことができるのではないか。ワークショップについては、子ども向けだけでなく、大人向けも楽しんでもらえると思う。建築は、平屋で階段がないというのが個人的にはとてもよい。せっかくの美しい庭、芝生の中に入っていける道などがあって、現代風の何か写真を撮れる工夫があったら、もっと若い人にも注目してもらえるかもしれない。難しい時代だがカフェは必要、屋外でもテラスのようにお茶を楽しめればよい、ただ展覧会を見るだけではなく体感できるように。また、欲を言えば１点でよいので作品が入っていた箱を一緒に展示したり写真で紹介したりするのはどうか。作品がおさめられている状態など一般的に知識を広めることにもつながる。箱書きの内容、書いてある書体、歴史的な様式などを知る機会は後世のためにもなる。SNS については、美術館スタッフ（美術に詳しい職員以外も含めて）の「私のおすすめ」など月替わり程度で発信するのも面白いかもしれない。(B 委員)

・カフェの再開はすぐに取り組むべき。美術に縁遠い層にとっては美術館にこないことには「ついで」にもならないので、きっかけづくりなど、できることは早く始めた方がよい。外国の日本庭園を見たことがあるが、毎日何か目をひくイベント的なことをやっていた（例えば彫刻家が作品を作っているなど）。美術を知らない人にとっては「何がすごいのか？」を知るために興味をひくしかけができないか。昨今はQRコードや音声ガイドの活用など、パネルで多くを表示しなくてもデジタルデータでできることが増えている。展示していない作品の情報を伝えることも可能。人口減少の時代、美術に興味を持っている世代も減っていく。こだわりのある部分も大事かもしれないが、ライト層をいかに取り込んでいくかということも考えていけば、文化や芸能の集積地になり発展につながるのではないか。水墨美術館は、先入観で水墨画しか展示していないと思っていた中、CM を見ていろんな展示をしていることを知った。展示室では、作品のキャプションに読み仮名があった方が、子どもにも読めてよいと思う。(C委員)
・観覧者に高齢者が多いとは聞いているが、もちろん若い世代に来てもらえばうれしいが、高齢者中心というのは、すばらしいことだと思う。その線でしっかり腰を据えた方が、差が出るのではないか。高齢者にやさしい施設にもっと特化してもよいと思う。高齢者の立場で考えると文字が小さかったりするので、展示の仕方や解説の工夫など、もっと親切でわかりやすくしたらよいのではないか。見出しのような「こだわりポイント」みたいなものを示せば興味をひいて見やすくなるのではないか。そして興味を持った人にはどんどん解説なども読んでもらえばよい。(D委員)
・美術文化を将来に渡って育てていくには、やはり若年層が大事だと思う。「孫とおでかけ」を富山市も実施しており、あちこちで祖父母と孫を見かけるが決してマナーは悪くなく、ちゃんと指導されているようだ。子どもたちなりにいろんな感覚で鑑賞するので、鑑賞の「視点」を与える簡単なワークシートのようなものがあると、考えるきっかけになって興味を持って見ると思う。大げさなものではなくちょっとしたことでよい。(E委員)
・美術館から徒歩圏内にある富山大学五福キャンパスは、学生数も多い。また、大学だけでなく小中学校、高校も周辺には多くあるので、若い世代を取りこむ工夫が必要だと思う。また、「学芸員」という仕事を知らない学生が多いのではないか。学芸員の皆さんはメディアに出演されることも多いが、SNSなどでも発信して若い世代とコミュニケーションをとるような機会があるとよいと思う。(F委員)
・美術館まで来てもらわないことには始まらないので、美術館の趣旨とは離れるかもしれないが、キッチンカーを呼んだりイベントを開催したりすれば、家族連れにも来てもらえるのではないか。例えば夏休みには、宿題の絵を描いたりその場ですぐ参加できるようなイベントを毎日開催したり、SNS の#（ハッシュタグ）を使って何か働きかければ、親子連れの来館が増えるのではないか。(G委員)
・やはりカフェは必要。大学にカフェが新設されたら利用者が増えたと聞いた。富岩運河環水公園にもカフェがあるが、利用者が多い。せっかくの桜の時期も、休める場所があるとよりゆっくり楽しめる。また、圧倒的に50代以上の観覧者が多いが、外国の有名美術館で小さい子どもたちが訪れているのを見ると、やはり習慣だと思う。美術館は決して敷居の高いものではないということを幼いころから身につけてもらいつつ、高齢層のライフスタイルにも対応できるとよいと思う。(H委員)

・この美術館は極めてコストパフォーマンスがよいと思う。このスタッフ数と予算規模でいろんなことに精一杯取り組んでおられる。25 周年、30 周年に向けての思いもしっかり意識しておられるようなのでいろいろ期待するが、規模的に、美術館だけの力でできるものばかりではなく、県の文化政策として取り組まなければならないような大きな話もあると思う。例えば、一般企業への WEB 広告のようなタイアップなども考えたらよいと思うし、美術館の現場で困っているアクセスや立地の問題、入口や展示ケースの問題のような大きなことは、周年という機会をうまくとらえてすすめていただきたい。(I 委員)

・これまで自分自身が深く携わってきた展覧会は、どれも「水墨画」の展覧会ではない。水墨美術館というネーミングは、全国で見てもとても珍しく特徴的である一方、水墨画しか展示しないと思われがちなマイナス面もある。今さら館名を変えることはできないので、水墨画だけではないということをどうしたらアピールできるかを考えたらよいと思う。また、全国巡回の展覧会では、東京と地方都市では、観覧者数も図録の購入率もずいぶん違うと感じる。東京では著名なブロガーに協力してもらうなど発信力が強いので、やはり SNS の使い方は重要。(J 委員)

・いつも水墨美術館に来るととても心が落ち着く。子どもたちが見に来て、興味を持って、大きくなった時にもまた足を運んでもらえるような取り組みに期待したい。子どもたちが関心を持つような、例えば動物などわかりやすいテーマの展示をアピールできればよいのではないか。(K 委員)

・委員の皆さんからの有意義な意見を、今日だけで終わることなく、25 周年、30 周年に向けて、運営に活かしていただきたい。ますます深めるために継続的に検討し、強化するように、様々な人、例えば施設の業者や専門家に相談、協力してもらいながら、ますます素晴らしい美術館にしていただきたい。(L 委員)